彙報

第五九回野尻湖クリルタイ

舩田　善之

第五九回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会）は、二〇二三年六月二三日（金）～二五（日）に長野県野尻湖畔の藤屋旅館で開催された。周知のように、COVID-19の影響は学術団体の活動にも及び、本会のように合宿形式で開催する学会に極めて大きな影を落とした。三年前の二〇二〇年は開催を見送り、二一・二二年はZOOMによるオンラインで開催（二二年は事務局と発表者のみ藤屋旅館で参加・配信）したため、全面対面での開催は実に四年ぶりである。今回の開催を喜ぶとともに、困難な時期に会の継続と通常開催への復旧に尽力した世話人の方々、そして以前のように会場と宿泊・食事を提供していただいた藤屋旅館に衷心より感謝の意を表したい。四年ぶりの対面開催であることに加え、時期がこれまでより約一ヶ月早まったため、どの程度の参加者が集まるか不透明だったが、結果として三四名が参加した。特筆すべきはそのうち一四名が学生だったことである。若手研究者の減少が懸念される中、非常に歓迎されるべきことであった。

まず、参加者によるコンフェッションの概要を記す。オンライン開催時は、ブレイクアウトルームを用いて限定的に実施したため、こちらも四年ぶりである。以下、「今年」とは二〇二三年、「昨年」とは二二年を指し、昨年のクリルタイ以降に活字化されたものを中心に業績を紹介する。副題と書籍等の編者名・出版年は原則として省略した。

石山実弥（筑波大M）は、二〇世紀初頭中央アジアの近代民族形成やソ連共産党地方政府のプロパガンダに関心をもち、日本中央アジア学会で「中央アジア・ビューローのプロパガンダ分析」を口頭発表。今年九月より一年間ウズベキスタンのタシケント国立東洋学大学に留学予定。**伊藤一馬**（大阪大）は「「宋西北辺境軍政文書」と宋代の軍事体制」（『宋代とは何か（アジア遊学二七七）』勉誠出版）、「北宋の対西夏戦略と情報伝達」（『神女大史学』三九）を執筆。**岩田啓介**（筑波大）は「『西蔵自治区檔案館館蔵蒙満文檔案精選』について」（『満族史研究』二〇）、「一七五〇年チベット政変前夜の清朝・チベット・青海モンゴル関係」（『日本西蔵学会々報』六八）を執筆。チベット牧畜文化と交通にも関心をもち、共同研究・調査を実施している。**岩橋武大**（東京大M）は、清代モンゴル・チベット史、とくに南モンゴルの旗におけるラマの活動に注目して研究。**大出尚子**

（北海道大・学振ＲＰＤ）は二〇一〇年以来の参加。皇産としての瀋陽故宮への関心から、最近は盛京三陵・溥儀の研究に取り組む。「中国近代史における盛京三陵管理問題と溥儀」（『東洋学報』一〇四―四）を執筆。**大野和馬**（東京大Ｍ）は、中央アジア史、東トルキスタン史を研究。早稲田大学に提出した卒業論文では、国際的な商業網を中心的に扱い、現在はよりローカルな経済活動に着目し、一九世紀のカザーフ草原や中央アジア、東トルキスタンにおける伝染病発生、及びそれらと定期市、家畜交易との関係性について取り組む。今年八月にカザフスタンとウズベキスタンの文書館を訪問する予定。**尾崎昇**（大阪大Ｍ）は、古代チベット（吐蕃）史を専攻し、古チベット語文書・木簡を解読しながら、吐蕃支配下の税制や駅伝制等を分析。「古代チベット（吐蕃）帝国の税役制度に関する考察」（『若手研究者フォーラム要旨集』七）を執筆し、敦煌チベット語文書研究会で報告。論文「敦煌出土の古チベット語択日占文書」を執筆中。**小沼孝博**（東北学院大）は、「ムッラー・ムーサー・サイラーミーの史的探求」（『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）等を執筆したほか、“Manchu Words Referring to the Qing Emperor”（*Saksaha: A Journal of Manchu Studies*, 12）が刊行予定。新刊紹介・報告・講演も多数あり、東洋文庫「大明地理之図」データベース（https://static.toyobunko-lab.jp/daiminchiri/）の公開に協力して解説を担当。**小野響**（電気通信大）は初参加。五胡十六国政治史を専門とする。「大単于の復活と消滅」（『集刊東洋学』一二七）、「天可汗の現実と理想」（『東洋史研究』八一―三）等を執筆、第十三回中国中古史青年学者聯誼会等で報告。今年七・八月に南京・上海でそれぞれ報告予定。**闓和**（立命館大）は、満洲社会の女性、貴族文化史や宗教文化人類学研究に従事。二〇二一年に博士号を取得し、現在立命館大学の専門研究員を務める。**姜旼志**（東京大Ｄ）は、清朝入関前の集住政策を研究。昨年、修士論文「清初国家形成期におけるヌルハチの集住政策」を提出。細谷良夫『清朝の史跡をめぐって』に対する張永江の書評「永遠に調査の旅路を行く」（『満族史研究』二二）を中井勇人・鍾周哲と共訳。**木村暁**（東京外国語大）は初参加。中央アジア近世・近代史を専攻し、政治と宗教の関係、地域概念の歴史、現代のイスラーム復興を研究。「トルキスタンを歴史化する」（前掲『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』）を執筆し、ウズベキスタン科学アカデミー歴史研究所研究セミナーなどで発表。今年七月に、TUFS Cinema ウズベキスタン民族誌映画上映会『神授の花』を和崎聖日と共同企画。**久保田和男**（長野高専）は、大元ウルスの都城（大

都・上都・カラコルム）及び南唐金陵・北宋開封・南宋臨安の比較都城史研究に従事するとともに、彗星出現をめぐる比較史的研究を進める。『宋都開封の成立』（汲古書院）を上梓したほか、「臨安の「国城」（京城）をめぐって」（『長野工業高等専門学校紀要』五七）等執筆・報告多数。**近衛飛鳥**（ハスチムガ）（千葉工業大）は、モンゴルの衛生・医療史を専門とし、一九世紀以降モンゴルにおける宣教医療・植民地医療及び伝統医学の処方箋の整理・出版を進める。モンゴルで布教した西洋宣教師の残した文献史料を収集するプロジェクトを昨年より実施中で、『内モンゴルの医療衛生の近代化』（仮題）の刊行を予定。**小林岳**（筑波大M）は、ウズベキスタンにおける移民と権威主義体制、移民政策、労働移動を研究。現代の移動の中で保持される伝統・地域・宗教規範とその実践に関心をもつ。昨年九月より今年二月までサマルカンドにてインターンシップを利用した言語学習、予備調査を行った。**笹川春哉**（広島大M）は、宋金交替期における中央官制の継承を中心に、劉斉の研究を進める。立命館大学史学会例会で「劉豫斉と淮西兵変」を口頭発表、中国四国歴史学地理学協会でも報告予定。増井寛也・猪俣貴幸・笹川春哉「『東夷考略』訳注」が『立命館文学』に掲載予定。**鍾周哲**（東京大D）は、清朝史・満族史を専攻し、入関前のマンジュ国家の政治構造を研究。満族史研究会大会・国際満学青年学者論壇で口頭発表「「天命後期の職務分掌体制とjurgan」・「論「満文原檔」之「往字檔」」を、それぞれ行い、劉小萌「《自著を語る》書斎からフィールドへ」（『満族史研究』二二）を中井勇人と共訳。**杉山清彦**（東京大）は「細谷良夫先生のご足跡と思い出」（『内陸アジア史研究』三七）を執筆し、史学会公開シンポジウム「君主号と歴史世界」で報告。『大清帝国の形成と八旗制』（名古屋大学出版会）が重版。今年一二月に代表者を務める科研のシンポジウムを予定。**鈴木宏節**（神戸女子大）は、「漠北回鶻汗國的突厥碑銘」（『域外漢籍研究集刊』二三）、「追悼　内藤みどり先生」（『内陸アジア史研究』三七）を執筆。突厥碑文拓本のデジタル・アーカイブ化にも取り組む。**高倉駿**（筑波大）は、コーカンド・ハン国史を研究し、一八～一九世紀のフェルガナ地域の社会・生態的変容や都市と後背地をめぐるエコシステムに関心をもつ。二〇二一年に修士論文を提出し、現在は職員として勤務しながら研究を行う。**トウメン**（会社員）は飛び入り参加。大学院修了後、民間企業でODA関係の業務に携わり、アジアを中心に五一ヶ国に出張。コロナ禍を経てリスキリングを模索し、博士課程への進学を検討中。**中井勇人**（東京大D）は清朝形成以前のジュシェン領主社会の構造について研究。林慶俊と共著で「壬辰戦争期に加藤清正と遭遇したワルカ

系領主家系」（『壬辰戦争と東アジア』東京大学出版会）を執筆したほか、鄭潔西「沈惟敬の「東行」と豊臣秀吉の降表」（同書）等を翻訳。**中村篤志**（山形大）は「第五八回野尻湖クリルタイ」（『東洋学報』一〇四―三）を執筆し、堀内香里『清代モンゴル境界考』の書評を『内陸アジア史研究』三七に寄せた。モンゴルで『ドンドゴビ県ハラチン駅站の過去と現在』（モンゴル語）を出版予定。**野田彩乃**（お茶の水女子大M）は、清史、とくに国家儀礼の形成・整備に注目した政治史・文化史を研究。東京大の杉山清彦ゼミも聴講し、満洲語の学習も開始。**萩原守**（摂南大）は昨年三月に神戸大を退職し、『萩原守先生　年譜・業績一覧』（神戸大学国際文化学研究科萩原守先生　年譜・業績刊行会）が編まれた。「一八世紀末外モンゴルの事例から見る人身売買と婚姻」（『「帝国」の秩序と再編』日本大学文理学部）を執筆。今年八月ウランバートル開催の「国際モンゴル学者会議」で一九世紀末フレーの監獄に関する口頭発表を行う予定。**朴一賢**（東京大D）は学部・修士課程を高麗大で学び、四月より東京大の博士後期課程に進学。清代マンチュリア史、朝清辺境地域史を研究し、とくに一八世紀以降のマンチュリアにおける朝鮮人参の採集と地域社会の変化に関心をもつ。**舩田善之**（広島大）は「キタイ・タングト・ジュルチェン・モンゴル」（『岩波講座世界歴史』七、岩波書店）等を執筆したほか、NHK BSプレミアム『プロファイラーIF』制作に協力。**堀川徹**（京都外国語大名誉教授）は第十回から継続して参加。「Epilogue シャリーア法廷文書収集・研究プロジェクトの二十年」（『帝国ロシアとムスリムの法』昭和堂）を執筆。分担執筆を担当した『アジア人物史』第八巻（集英社）が刊行予定。継続して文化講座を精力的に担当する。**松下憲一**（愛知学院大）は『中華を生んだ遊牧民――鮮卑拓跋の歴史』（講談社）を上梓した。同著ならびに第五六回の本会での報告で『魏書』等に記録される拓跋部の大鮮卑山からの南下を北魏時代の創作と位置づけたが、この成果を踏まえ、墓葬等から同部の発祥地の新たな解明に取り組む。また、今年八月にモンゴルで発掘調査に参加予定。**真部友希子**（東京外国語大学部生）は、中央ユーラシアの騎馬遊牧民に幅広く関心をもつ。大学ではロシア語専攻に所属し、今年二月にカザフスタンでロシア語の短期研修留学。漢語・カザフ語も勉強中。**宮脇淳子**（東洋文庫研究員）は精力的に多数の著書を刊行。二〇一九年第六二回PIACでの報告論文“Tibetan Buddhism and Nomadic Mongolian Regimes”が*Religion and State in the Altaic World, Proceedings of the 62nd Annual Meeting of the Permanent International Altaistic Conference*に掲載。「巨大化が遊牧帝国特有のシステムにもたらした機能不全――モン

ゴル帝国の崩壊」（『帝国の崩壊』山川出版社）を執筆。今夏カザフスタンで開催の第六五回PIACに参加予定。**姚立彬**（大阪大M）は、七～十世紀の中央ユーラシアにおけるササン系勢力等イラン人の活動について研究。Tabarestān Documentsを読みながら中世ペルシア語を学習中で、バクトリア語文書にも挑戦。**和崎聖日**（中部大）は「ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフの軌跡」（『アジア・アフリカ言語文化研究』一〇二）、「妻の権利をめぐる人間模様――現代ウズベキスタンの「法」制度と運用」（前掲『帝国ロシアとムスリムの法』）、Adham Ashirovとの共著論文“Sufism and Interethnic Coexistence in the Southern Region of Uzbekistan on the Post-Soviet Era”（*Orient*, 58）等を執筆。木村暁らと共同制作した民族誌映画『交霊とイスラーム』（共監督も担当）・『神授の花』を多くの映画祭・国際会議等に出品・上映。**渡邊琉可**（東京外国語大学部生）は、ロシア語、ウズベク語専攻に所属し、中央ユーラシア史（主に西トルキスタン）、歴史人類学、社会史に関心をもつ。日本・ウズベキスタン学生学術フォーラム二〇二二で「ウズベキスタンにおける移動・集合と民俗」を口頭発表。ペルシア語も学習中。今年九月より来年六月までタシュケント国立東洋学大学テュルク学部に留学予定。逐一紹介できなかったが、多くの参加者が『中央ユーラシア文化事典』・『イスラーム文化事典』（丸善出版）の項目執筆を担当していることも特筆したい。

続いて研究報告の概要を紹介する。二三日は夕方の部と夜の部それぞれ一本。**大野和馬**「十九世紀後半のカシュガリアを巡る国際貿易の実態について」は、一九世紀後半のカシュガリア（天山以南のオアシス地帯）を対象に、その西方や南方との貿易関係について検討した。三つの時代区分を設け、物流の方向や取引品目から時代ごとの貿易の特徴を把握することにより、最終的にそれらを総合的に俯瞰しようとするものであった。茶や綿織物が行き交うカシュガリア貿易では、一八六〇年代の回民反乱勃発や英露の領土的進出を契機として、従来とは異なる構造が形成された。それは、カシュガルから北西に伸びる新交易路の隆盛や外国製綿織物の流通量増大、カシュガリアへの茶の「逆流」などの形で現れた。新たに構築された交易活動の多様性や広域性は、貿易が安定化する一八八〇年代以降も概ね維持・発展した。以上の考察から、一九世紀後半は、貿易上の様々な局面で変化を経験した一大転換期として評価されるとする。そして、貿易の中でカシュガリアが果たす役割は変化し、同時に「カシュガリア貿易」が指示する地理的・概念的範囲も拡延したと結論づける。**宮脇淳子**「常設国際アルタイ学会（Permanent International Altaistic Conference）

の歴史」は、一九五八年西ドイツで始まる常設国際アルタイ学会（PIAC）の歴史を概観した。同学会は、アルタイ山脈の東西に広がるトルコ諸語、モンゴル語、ツングース語などをアルタイ語族と総称することから名づけられた組織で、冷戦下で東西に分かれた世界各国の研究者たちが自由に参加し情報交換を行なうことを目的とし、毎年世界各地で開催されてきた。もっとも重要な行事は、参加者全員が出身国や年齢や地位にかかわりなく自己紹介と最近の業績について報告できる「コンフェッションズ（告白）」である。野尻湖クリルタイ（別名日本アルタイ学会）はPIACを参考にして一九六四年に始まった。宮脇の夫・故岡田英弘は、PIAC参加報告計十六本、野尻湖クリルタイ報告計十四本を執筆した。宮脇は二〇二五年夏、三十年ぶりのPIAC日本招聘を予定している。過去のPIAC及び野尻湖クリルタイから選りすぐりの写真や二年後の日本における開催予定地から成るスライドは、参加者の興味を惹いた。

二四日午前の報告は二本。小野響「冒頓単于と前趙の建国――国号の変更と祖先祭祀対象の変更を中心として」は、五胡の匈奴漢王朝の劉曜による趙への国号変更、同時に行われた五行の変更と冒頓単于の配天を考察する。五胡諸王朝の一つ匈奴漢王朝は、三一四年に外戚の靳準がクーデターを起こし、大きな打撃を受ける。この靳準の乱のため、匈奴漢の都たる平陽に居た匈奴漢皇族は皆殺しにされた。故に匈奴漢宗室の傍系で長安に駐屯していた劉曜が即位した。劉曜は、靳準の乱を平定するが、漢という国号を維持し続ける事を放棄し、趙に国号を変更した。また、それと同時に国家祭祀で祀る対象として冒頓単于を設定した。従来の研究はかかる三点の改革をそれぞれに分析してきたが、これを同時に行われた三つの改革であった事を重視し、その総合的検討の必要性を主張する。そして、これら三つの改革は劉曜の多種多様な内憂外患を一挙に解決すべく、同時に行われた必然性のある改革であり、その背景にある冒頓単于は、数百年の時を経てなお五胡十六国時代においてその名声の政治的利用が効果的な存在であった事を結論として提出した。闓和「乾隆帝五皇子榮純親王家未公開史料『榮府家承』に基づく満洲貴族文化史の学際的研究」は、標題に掲げられた史料に基づく研究計画とその展望を述べる。本史料は、親王永琪から第九代鎮国公世子啓孫まで連続する叙述を有し、清皇室自らの視座から八旗社会の状況を記録したものである。本研究は、学際的研究を行うことにより、その史料的価値を証明することを目的とする。本史料は、清の支配層固有の社会構造及びその文化に対する考察を可能にし、それによって満洲社会文化史の実態を解明することができると主張する。

午後の報告も二本。伊藤一馬「「東部ユーラシア」と「宋代中国」」は、近年の学界におけるトレンドのひとつとなりつつも、共通見解がないと指摘されている「東部ユーラシア」（ユーラシア東方／東ユーラシアなどとも）を議論の俎上に載せる。まず、各論者の見解を整理し、「東部ユーラシア」は、論者によって設定される空間的・時間的範囲のみならず、性格・意図や指標・方向性においても大きな相違が認められるとする。これらを踏まえ、「東部ユーラシア」の共通見解を見出すのは困難であり、むしろ論者ごとの見解を正確に把握することが肝要であるとの見方を示した。次に、「東部ユーラシア」に対して厳しく批判を加える「東アジア世界論」との関係について、「東部ユーラシア」の多くは「東アジア世界論」の〝完全上位互換〟を目指しているわけではなく、議論が若干噛み合っていないのではないかと指摘した。最後に、「東部ユーラシア」の視点を取り入れることで拓ける宋代中国史の可能性についても展望を提示した。中村篤志「モンゴル国におけるハラチン集団――清代駅站の社会史的考察」は、清代に内モンゴルから動員され、漠北モンゴルの基幹駅站を維持していたハラチン集団について、その来歴や現在に至るまでの歴史をまとめ、特に駅站寺院の分析を通じてその社会史的意義を考察した。ハラチン集団は、漠北ハルハ社会において人数的にマイノリティではあったが、駅站維持のため常に清朝から保護される特権的集団であった。その象徴が駅站毎に建てられた駅站寺院である。主に一八三〇～六〇年代に集中的に整備されたこれら寺院は今も遺構が残っており、現地調査などから、清代の他の地方寺院と同等以上の規模があったこと、寺院が清朝崩壊時に集団をまとめる核となっただけでなく、現在でも保存・改修され、再結集の核として機能していることを明らかにした。また、このような清代の地方寺院は殆ど研究されておらず、現地の遺構調査や文献調査が求められることを指摘した。

夜の部の報告は一本。和崎聖日・木村暁「民族誌映画『交霊とイスラーム――バフシの伝えるユーラシアの遺習』の上映と解説」は、民族誌映画『交霊とイスラーム――バフシの伝えるユーラシアの遺習』（二〇二二年制作／日本・ウズベキスタン／三七分／和崎聖日、木村暁、アドハム・アシーロフ共同制作）の上映と解説を行った。本映画は、ウズベキスタンのスルハンダリヤ州（コングラト部族出身のウズベク人が多く居住する村落）とジッザフ州（ユズ部族出身のウズベク人が多く居住する村落）を舞台とする。そこではバフシと呼ばれる霊媒が交霊による病気治療の儀礼にあたる姿が今も観察される。また科学的無神論を標榜し、宗教を抑圧したことで知られるソ連の時代にも、この療病

儀礼は営まれつづけていた。本作は、シャマニズム的交霊とイスラームの融合の位相に光を当て、土地の習俗に根ざしてきた福利のありようを当事者たちの独特の世界観（ソ連時代の回想も含む）とともに炙り出すものである。中央アジア・イスラーム研究の分野において一次資料としての価値を有するもので、参加者も興味深く観賞し、質疑も活発に行われた。

二四日は朝食後に解散した。

手探りの中の対面開催ではあったが、報告のラインナップからは、歴史学・文化人類学にわたり、かつ時代・空間の面で幅広く配置される、この数年の傾向を見てとることができる。今後、考古学・言語学等様々な分野を専門とする研究者の参加・報告を期待したい。冒頭にも述べたように、今回多くの学部生・大学院生の参加を得たことは、この集まりにとって喜ぶべき状況であった。参加者の中には、は、コロナ禍のために来日延期を経験した留学生も少なくない。多くの参加者が昨年あるいは今年からようやく調査や学会のために海外渡航が可能になったと述べていた。今なお国際情勢のために渡航できない地域が存在する現実に直面せざるを得ないが、そのような中でも各自が工夫して調査地や留学先を選定していることも知ることができた。

また、初参加の、あるいはオンラインのクリルタイしか知らなかった若手参加者も、初めての対面開催を存分に堪能したようである。四年ぶりの大広間でのトイ（宴）も大いに盛り上がり、多くの参加者が遅くまで飲み語らい合い、親睦を深めることができた。世代を越えた縦のつながりと専門分野・所属を越えた横のつながりを作ることができることこそクリルタイの醍醐味であるという堀川徹の言が心に深く刻まれた。

来年（二〇二四年）は六月二八日（金）～三〇日（土）を第一候補として、同じく藤屋旅館で開催される予定である。新たに参加を希望される方は、野尻湖クリルタイ事務局（altai.khuriltai@gmail.com）までご連絡いただきたい。

（広島大学大学院人間社会科学研究科・准教授）